

午後 2 時 05 分 開始

【秘書広報課長補佐】 では、お待たせをいたしました。ただいまより平成26年 5 月市長定例記者会見を始めさせていただきたいと思えます。

まず、幹事社様のほうからご挨拶をお願いします。

【記者】 本日の定例記者会見、報道向けの舞鶴若狭自動車道の現場公開がありまして当初の時間より30分おくらせていただいたのですが、さらにちょっとおくれることになってしまいまして、どうも申しわけございませんでした。よろしくをお願いします。

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。

では、本日の会見の進行につきましては、お手元に配付をさせていただいております次第のとおり、最初に市長の挨拶、その後、1項目につきまして事業発表をさせていただきます。その後、ご質問につきましては、この事業発表についてからお願いしたいと思います。事業発表に係る質疑応答終了後に、次第の3番目になりますフリーの質疑応答へと進みたいと思っております。なお、終了は15時を予定しております。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

それでは、市長、よろしくをお願いします。

【市長】 それでは、5月の会見でございまして、記者の皆さん方には先ほど舞鶴若狭自動車道の現場を視察をいただいたということでございまして、明日またいろんな形で報道がされるというふうに思えます。舞鶴若狭自動車道の開通というのは、私どもの地域にとって非常に重要なこととございまして、大体7月中ということとありますけれども、できれば早くその日にちがわかりますと大変ありがたい。これはご承知のとおり、日にちが決まりますと、それに合わせたいろんな広報活動、またご商売をされている皆さん方もその日に合わせてのイベント等々の準備ができるわけとありますので、一日も早く7月何日というのがわかるというふうな期待をいたしておるところとございまして。この舞鶴若狭自動車道の開通によって、私どもの地域、今もう既に取り組んではおりますけれども、決して通過点にさせないという強い思いでしっかりとしたまちづくり、また、おもてなしの心をしっかりと持ちながら対応すべく頑張りたい、このように思っているところとございまして。

それでは、発表項目に従いまして、これからお話をさせていただきます。1点しかございません。

つるがふるさとサポーターの新設でありまして、今年度からより広域的かつ効果的に敦賀の魅力発信をしようということで、このつるがふるさとサポーター事業を新たに始めさせていただきます。この事業につきましては、本市のPRを目的として、本市にゆかりのある著名人によって平成9年度に設置をいたしましたつるが大使、これを発展的に解消し、創設をしたものであります。

内容につきましては、本市、敦賀市を応援していただける方をサポーターとして認定し、サポーターの自発的な活動によって敦賀の魅力を広く全国に発信し、認知度の向上を図ることで、まちづくりの振興につなげる新しい取り組みだというふうに思っております。サポーターの方々には、敦賀の最新情報、また話題の人物のコラム等を掲載いたしましたふるさとミニマガジンをお住まいの地域等で配布しPRをしていただきますとともに、ふるさと納税や政策への提言を通じて敦賀市を応援をしていただきたい、このように思っております。

この登録についてでありますけれども、応援をしていただける市外在住者等であればどなたでもなることができます。全国各地で敦賀のサポーターをふやして本市の魅力を広く発信をしていただくとともに、敦賀ファンということで、そういう方を一人でも多く獲得ができますように頑張りたい、このように思っております。

私のほうからは以上です。

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。

それでは、ただいま発表いたしました項目について、まずご質問をお受けいたしたいと思えます。

最初に、幹事社様、何かございましたらお願いいたします。

【記者】 今ほどおっしゃいましたように、つるが大使については発展的に解消するということで、制度そのものをもうなくされるということでしょうか。

【市長】 はい。そのとおりです。また、今までふるさと大使をしていただいた方にも、サポーターとしてまたお力をいただきたいなと思っております。

【記者】 ちなみに何人ぐらいつるが大使はいらっしゃったんですか。

【理事（企画政策担当）】 11人です。

【記者】 あともう1点。ミニマガジンの内容で、市長、今ほどおっしゃった著名人、どなたがどういう内容のことを書かれているものなんですか。

【理事（企画政策担当）】 ミニマガジンにつきましては、A4判で四つ折り、大体名刺サイズぐらいの大きさになりますけれども、観光情報を入れましたり、それからタウン情報、それからさまざまな特性とか人物とか、本市の特性とか魅力を内容としたものを入れていきたいというふうに考えております。

【市長】 例えば、今までつるが大使でお世話になった皆さん方に一言言っていただいたりとか、それはまたこれからいろいろ企画をしていきたいと思っております。

【秘書広報課長補佐】 それでは、各社、お伺いいたします。発表項目につきましてご質問ありましたらご挙手をお願いしたいと思います。ございますでしょうか。

それでは、次第の3番目、フリーの質疑応答へ移りたいと思っております。

これも幹事社様のほうからありましたらお伺いいたします。

【記者】 先週ですけれども、県がエネルギー成長戦略特区を提案したというふうにあるんですけれども、その中で敦賀市がどういう役割を担うのかとか、この特区そのものについて敦賀市としてどういうふうに捉えていらっしゃるのかというのがありましたらお願いします。

【市長】 特区の申請していただいたんですけれども、その前段といたしまして、私ども、知事初め県の皆さん方とお話をする中で、やはり敦賀の港でありますとかエネルギーでありますとか、またエネ研もございまして、そういうのを含めて敦賀として、今大変原子力も停止をしている状況の中で、元気をつけるのにどうしたらいいかなというお話をする中での一つの方向性ということで、これは特区という形で申請をしていただいたというふうに思いますし、私どもも大変ありがたく思っております。

ただ、その細かい詳細というのは、まだ打ち合わせまで入っておりませんので、まず申請をして、やはりこういう特区申請というのは2番手、3番手では遅いものですから、そういうことを見据えて早く申請をし、そして、これから事務方レベルの中で細かい打ち合わせなどもしていくというふうに思いますし、敦賀とすればエネルギーというのが一つのポイントだというふうに思っておりますし、港も私どもの、やはり敦賀港という大変すばらしい港を有しておりますので、そういうものをしっかり活用した形でこういう特区というものが認められ、そして国の中で位置づけられていけば大変敦賀にとってもすばらしいことになるというふうに思っておりますし、これから十分県当局とすり合わせをしながら実現に向かって最善の努力をしていきたいというふうに思っています。

【記者】 今のお話の中で、LNG基地について、県が県内に誘致したいという話が前から出ておりますけれども、この特区と絡んで敦賀市にその基地を誘致する方向というか、そういう色合いが強まっているとか、そういうことはないんですか。

【市長】 私ども、LNG基地については、かつてそういう構想もありまして、ある程度心構えというのはできております。そういう中で、港を活用することと、やはりLNG基地となりますと、それとLNGを利用した火力という話も出ておりますし、そうなるくと敦賀というのは送電線初めいろんなインフラが整っておりますので、敦賀としてやっていくことがベストであるというふうに私どもも考えておりますので、そのあたり、そうなる、じゃ場所云々とかいろんな細かいことを進めていかなくはなりませんから、それはこれからしっかりと県とすり合わせをしていきたいというふうに思いますし、私どもとすればそういうことであれば協力をしながら受け入れはしていきたい、このように思っています。

【秘書広報課長補佐】 その他ございますか。

【記者】 敦賀市内で起きた停電の件なんですけれども、あれについて市長としてお考え

というか思いみたいなものを。起きてすぐ、6分間というのですぐ直ったことはありますけれども、北陸電力さんに何か言うこととか、東京電力、八王子とかでもありましたけれども、ああいった大きな事態にならなかったことは幸いと思いますけれども、何かお考えがあれば。

【市長】 まず停電というのが近年なかったものですから、電気の重要性というのは再認識しましたのと、おかげさまで信号も全部とまりましたけれども事故がなかったということ。それと、たまたま八王子のほうで2時間強とまったということがありましたので、よく6分間で回復したなということ。ただ、まだ最終的な原因というのがちょっとわかっていないように伺っておりますので、まずそれをしっかり究明をしていただいて、やはり停電というのは、私ども、重要なところは非常用電源を持っていますので差しさわりはなかったんですが、やはり市民生活にとって非常に大きな問題だというふうに思いますから、そういうことのないようにまた北陸電力さんにもぜひ努力をしていただきたいというふうに思います。それだけ電気の重要性というものを逆に言うと再認識できた一つの機会であったかなという気はいたしますけれども、先ほど言いましたように、何事もなかったということにまず安堵をいたしております。電気は非常に大事なものであるなということを再々認識をいたしました。

【記者】 ありがとうございます。

それに関連してなんですけれども、電気が大切ということですが、今年夏、原発がない中で夏の夏を迎える見込みが高まっていますけれども、それに関して、市長、お考えは特にありますか。

【市長】 何とか計画では原子力発電なしでクリアできることはよかったなというふうには思いますけれども、その分CO₂をどんどん排出しながら発電をしなくてはならんという現状を見ておきますと、非常に憂えなければならない事態だというふうに認識をいたしております。なかなか温暖化というのは、いつきにどんと来るものではありませんので、じわりじわりと人間の体でいえば傷めつけているような状況が続けていくのが本当によいのかという議論をもっと国ですべきであって、そういうところに余り注意が行かずに、原子力発電所云々、危ないから云々というようなことが多く取り上げられていることは、やはり私は非常に問題だなというふうに思っています。この夏は何とか乗り切っていただきたいなというふうに思いますけれども、早く国としてエネルギーの、例えば基本計画まともりましたので、そういう中である程度のパーセンテージを上げながらCO₂をもっともっと削減しようというそういう動きを加速させてほしい、このように願っています。

【秘書広報課長補佐】 それでは引き続きまして、各社、ご質問ございましたら挙手をお願いしたいと思います。

【記者】 ちょっと質問の順番が逆になりますけれども、今のことに関連します。

きょうからクールビズですよ。首回りすっきりされておられるんですが、国のほうのクールビズ、ことしで10年目ですか、敦賀は敦賀で独自でやっていらっしゃるんですが、まずは、すっきりとされた首回りのクールビズ初日のご感想を聞かせてください。

【市長】 基本的に首がぎゅっと絞まっておりますと窮屈でありますので、非常に楽だなという思いもありますし、ネクタイを結ぶ時間が省略されましたのでちょっと楽だなということで、やはりちょっと開放的でありますので、公務員として、きょうも職員の皆さん方には公務員らしいひとつクールビズで爽やかにしっかり仕事をしてほしいということでも庁議の中でもお話をしておったんですが、そういう意味では、最近もう半年半年です。要するに半分がクールビズになっておりますので、だんだん定着もしてきましたし、かえって、ネクタイを締めるというのは、ある程度きゅっと絞まるというそういう意味もありますし、冠婚葬祭になりますとまたネクタイもしますので、仕事はこの形で、ラフな中にも規律を持って楽しく職員の皆さん方が仕事できるような環境づくりも大事でありますので、そういうことを思いながらきょうクールビズを迎えました。

【記者】 今し方質問がありましたが、クールビズをすることによって節電であったりとか電気の大切さを再認識するような効果もあるかと思えます。その辺のことをひとくだけいただければと思います。

【市長】 そうですね。もともとクールビズというのはそういうことで始まったのであり

ますけれども、定着しておりますし、節電等々については、これは常識という分野に入ってきているというふうに思いますので、先ほどもお話をしましたが、これは当然節電等には十分にこれから私どもも、そして国民全部がそういう形で、なるべくエネルギーを少なく消費しながら生活をするというスタイルにもっともっとなじんでほしいなという思いも持っております。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 冒頭もちょっとご挨拶いただきましたが、今我々見てきました舞鶴若狭自動車道ですけれども、県のほうは嶺北と嶺南の一体化というふうな話を一つ、時間短縮以外にも掲げています。このあたりで嶺北、嶺南の一体化に向けて、嶺南の一市長としてはどのようなお考えをお持ちでしょうか。

【市長】 まず敦賀を独自に見ますと、嶺南地域というのはいろんなつながりがありますから、例えば広域行政組合初めいろんなところでつながりがありますし、県内全体、特に小浜方面の皆さん方は非常に遠いと。要するに県庁へ行くのに遠いという感覚もありましたので、そういう一体化という思い。それと福井から見ても遠いと。ただ、敦賀の場合は今までも高速で嶺北とはつながっておりましたので、敦賀市から見るとそういう面での思いはなかったんですが、県全体として見たときに、やはり嶺南、嶺北という言葉が残っておる。そして嶺南振興局というものがまだ存在をしているという現状ですので、将来的にはそういうものがなくなって本当に福井県が一つとなり、嶺北、嶺南、均衡ある発展というものを知事も目指しておられるというふうに思いますが、そういう意味で舞鶴若狭自動車道がつながったことによって時間短縮はもとより、もっともっと心の交流と言うとあれですけれども、やはり嶺南、嶺北というものじゃなくて福井県が一つになる、そのような地域づくりというのは非常に重要だというふうに思っていますし、これは舞鶴若狭自動車道の開通というのが一つの大きなきっかけになるというふうに私どもも期待をいたしております。

【記者】 関連で、戻りますが1点だけ。

冒頭の挨拶の中で通過点にならないようにと。これは敦賀市としての思いだというふうに思いますけれども、具体的にはどのようなことを現時点で対策として考えて、また課題があって、どういったことを今後取り組んでいこうというふうに思われていますでしょうか。

【市長】 まず現在ですと、例えば高速で敦賀でおりて、そしてバイパスを走って小浜方面に皆さん行かれるわけですけれども、敦賀を通るという中で、さかな街があり、また、いろんなところに寄って今までは行く機会があったんですが、舞鶴若狭自動車道がつながってしまいますと敦賀のまちの中を走らなくなる確率は確実にふえるわけでありまして、そういう意味で、やはり敦賀に一度寄っていこうというそういう思い、そのために中心市街地、またお魚通り、博物館通り、そして金ヶ崎緑地、今いろんなところの整備に取り組んでおりますけれども、そういうところを魅力あふれるものにしていて、じゃここへ寄っていこうという、そういうような形で通過点にならないようにというふうなお話をさせていただきまして、このことは恐らく嶺南それぞれのまち、小浜市長も言っておりましたけれども、今までは小浜で全部おりたんだと。ところがそのまま乗って行ってしまうということで危惧されておりました、小浜市も私どものような思いの中で今まちづくりに取り組んでおります。これは嶺南それぞれの市町が同じ思いでありますので、そのあたり嶺南地域連携をとりながら、多くの皆さん方がこの地域へ寄っていただける、おりていただける、そういう地域づくりにこれからも邁進をしていきたい、このように思っております。

【秘書広報課長補佐】 ほかにございますでしょうか。

【記者】 原子力の話なんですが、先日、敦賀原発の破砕帯問題でいわゆる再審議の会合が規制委のほうで行われたわけなんですが、その中で先生方の意見を拝聴していると、なかなか厳しいものがあるかなと思うんですけれども、そこら辺、市長、改めて見解というか、お願いします。

【市長】 私ども何度も規制庁のほうに出向きまして、いろんな有識者、また外部からの先生方を入れて検討してほしいということでお話をしておりましたけれども、それもかなわず、全く専門家、例えば過去に携わった専門家の皆さん方も外された中での審議であり

まして、非常にこの審議の進め方には矛盾を感じております。恐らくああいう科学の世界というのは一般的にわかりませんし、最近では理研の問題もございました。恐らく素人が見てもわからない中での話でありますので、非常にわかりづらい、見えにくいものがあります。

私どもは、破碎帯等の問題については、わかりやすく科学的に何度も説明をしてほしいということをおっしゃっていただけますけれども、いまだそういうお話もいただいておりますので、再度どこか再々度になりますけれども、やはりそういう思いを国などにはぜひぶつけていきたいというふうにおっしゃるところでございます。ぜひ幅広い専門家の意見を聞きながら最終的な判断、これは最終的には政治が判断するんじゃないかなというふうに思いますが、政治家の皆さん方もそういう私と同じ思いを持っていただいている方もたくさんいらっしゃると思いますので、そういう皆さん方とも歩調を合わせながら、国に対ししっかりとまた物を言っていきたいというふうに思います。

【記者】 今のくだりで、最終的には政治判断というようなお話があったかと思うんですが、どういうところが政治判断になるのかというのをちょっと教えてください。

【市長】 これは規制庁が判断をする中で、政治家がやはり再稼働等々について決めていくんだというふうに思いますし、そのあたりで、例えば今の委員の皆さん方に対する不信というものが大きくなっていけば、当然政治家がいろんな判断をされていますので、そういう意味で政治が最終的に判断するんだというふうに思っております。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 3つあるんですけれども。

まず、もんじゅのことについてなんですけれども、最近もまた点検漏れが見つかって、敦賀本部長が説明に来るということがあったと思うんですけれども。また、それとは別に原子力機構の職員全体に対するアンケートがありまして、その中で、もんじゅを除く職員がもんじゅプロジェクトを進める自信がないというふうな回答が多かったというふうな報道もありました。市長さんは長年、もんじゅとおつき合い長いと思うんですけれども、こういうふうな結果になったというふうなことについてはどういうふうに思われているのでしょうか。

【市長】 機構全体のアンケートでありますので、もんじゅに対する見方を少し第三者的に見られてしまったんじゃないかなということで非常に残念でありますし、私は、もんじゅを持っている機構でありますけれども、機構全体としての意識改革というものをやらなくてはならぬ中で、まだまだ道半ばかなということをおぼろげに思っています。そういう意味では、これはもう経営層から現場全部、機構全職員が一致した思いの中で、確かにあれだけああいうことがあった、こういうことがあった、また漏れがあったということで、もんじゅ以外の職員の皆さん方もそういう報道を目の当たりにしながら自信を少しなくしていったということは考えられるんですけれども、そこを乗り切っていきません。やはりもんじゅプロジェクトというのは非常に重要なものでありますし、それを達成していくというのは難しいわけですので、まだまだ道半ば、しっかり改革を進めて全職員がやるぞという思いを持っていただきたい、このように願っております。

【記者】 わかりました。

やっぱりもんじゅは研究開発炉なので、ほかの商業炉に比べてまだ技術が確立されていないというふうなリスクがあるもとの敦賀市も受け入れてきたと思うんですけれども、そういうリスクはあるのに機構全体としてはその意欲が低いということに関しては、先ほど市長さんも残念と思われたと思うんですけれども、怒ってもいいのかなと思うんですけれども、そういう怒りとかは特にないのでしょうか。そういう状況に対して残念、頑張りたいというふうな思いのほかに、堪忍袋の緒が切れそうだとかこの前も言っていましたけれども、まだまだ待ち続けたいというか、どう思われているのかなと思うんですけれども。

【市長】 この改革については一応9月をめどにということで行われておりますので、いましばらく状況は見ていきたいというふうに思います。切れかけておりますけれども、まだ切れはおりません。

【記者】 わかりました。

次は、もんじゅに関連して、アクアトムなんですけれども、今は県と原子力機構とが話ししていて、敦賀市はその話し合いに加わっているのか、今どういう状況なのか教えてもらいたいです。

【塚本副市長】 私のほうから答えさせていただきますけれども、現状は変わってないんですね。4者の協議は再開されておりませんし、多分、これは推定ですけれども、現在球を持っている所有者の機構が県等と色々な協議をしているんじゃないのかな。その中で私どもにはまだこういうふうにしたらどうというようなご提案はないと。そういう状況です。

【記者】 敦賀市から文部科学省も加わってほしいとか、そんなふうなことを要望したりはしてないんですかね。

【塚本副市長】 うちの意向は、この4者会談を通じて敦賀市はこういう思いだということとはしっかり申し上げてありますので、その点についてうちが主導権を握って、みんな集まってもう一回再開しようという気持ちはございません。あくまでも所有者である研究開発機構がしっかり案をまとめて、みんなに意見交換をすべきだというふうに思います。

【記者】 わかりました。

それと最後の質問なんですけれども、河瀬市長に対して。ラムサール条約登録湿地の中池見湿地に、この前、イギリス人のクリストファー・ブリックス事務局長さんが見にこられました。市長さんにも会われたと思うんですけれども、ラムサールの中池見湿地を見て、いろいろすごい興味津々で回られていたんですけれども、最後に北陸新幹線が通るところを通ったときに、国交省の鉄道局の職員の人に、何でこのルートに、前から100メートル湿地側に動かして変えたのかって聞いたんですけれども答えられないような場面があったんですが、すごく大事なことなんですけれども、そういう国の人が答えられないような状況で、市長さんは、運輸機構からはルート変更の理由ってどういうふうに聞いているんでしょうか。

【市長】 ルートについては、基本的に今のルートの中でいく。そしてそれに対して調査をしておるということですので、まだ調査これからでありますから、そこで調査が出て、こうなる、ああなるという話になるというふうに思っています。まず今のところがやはり機構とすれば一番いい形で敦賀に入ってこれるルートだということで設計、準備していますから、それに対してどういう影響があるかという調査をしますので、やはりそれを待ちたいなというふうに思います。

【記者】 ちょっとわかりにくかったと思うんですけれども、ルートを変えたというのは、十数年前に環境影響評価をしたときは100メートルぐらい湿地より離れて東側だったんですけれども、認可されたときには100メートル湿地側、南西側になって、湿地の谷を横切るようになったということで、具体的に市長さんは、前から100メートル湿地側に入って谷を横切るようになったことについて、鉄道・運輸機構から説明の機会とかはあったんでしょうか。

【市長】 私どもの聞いている範囲の中で、ずっと入ってきたときに家があったり物件が移転とかいろんなそういう諸問題もありますから、なるべく、新幹線というのをご承知のとおり余り曲がってはいけないし、そして家など立ち退きとかがいっぱいあるとそれも大変ですので、それを計算しながらいったら今のルートになったようには伺ったんですけれども、それで環境的に中池見に極力影響が少なければそれでもいいですし、それで、これはもう大変だということになれば、また少しずらしながら、物件の移転は多くなってもやってくれるのか。そのあたりはまだ機構と話ししておりませんので。基本的には今のルートの中でまず調査をするということですから、調査をしていただけたらと思います。

【記者】 それで先ほどの話、ちょっと戻っちゃうんですけれども、事務局長さんはやっぱり湿地からできるだけ離してほしいと。できたら湿地を避けて通ることはできないのかというふうに要望というか、していたんですけれども、そういうふうにラムサールの方が言われたことに関しては、市長さんはどう思われますか。

【市長】 基本的には、ラムサールの皆さん方は影響がまずゼロに近いほうが一番いいと思っていらっしゃいましょうし、私どももゼロに近いほうがいいと思います。ただ、今の

時代はやはりそういう現代文明と自然が共存共栄する時代ですので、そのあたり極力影響の少ないような形で、私どもとすれば早く新幹線に来てほしい。今も前倒しというお話も出ておりますので、そういうものに間に合うような形の中で調査を進めていただいて、できれば、これならその影響も非常に少ないということが決まれば、早く着工してほしいなということを願っております。

【記者】 つまり、影響がゼロじゃなくてちょっとぐらいあっても、少なかったら今のルートでもいいというか、どのぐらいだったら許容できるんでしょうか。影響。

【市長】 それはわかりませんが、それは新幹線が来るよりも来んほうが影響がないというのはどなたもわかることですから、それが100メートル近くであろうが300メートル離れていようが、来ることによって影響というのは何がしかあるかもしれませんが、やはり極力少ないような形で、影響が極力少なければ私はいいというふうに思います。

【記者】 2点、敦賀原発の破砕帯に関してと、もんじゅについてお聞きしたいです。

まず敦賀原発の破砕帯についてなんですけれども、先ほど質問があったとおり、この前、有識者会合があって、これまでの認定と大幅な変更はないと。ただ、今後ピア・レビューの方々の意見を聞いて議論していくと。ただ、例えばピア・レビューの方々の意見を聞いても、これまでの活断層、活動性の疑いが拭い切れないという結論になった場合は、市としては受け入れる方向なんでしょうか。

【市長】 これは市として受け入れるかどうかのということとはわかりませんが、やはり説明ですね、まず。こういうことだという説明。まだピア・レビューの先生方も入っていませんし、私どもが要望しているいろんな専門家を入れて議論してくれということもやっていませんので、その段階をまず見るのが先決だというふうに思っております。要するに、科学的、技術的に私はまだしっかり審議がされていない、このように思っております。

【記者】 先ほどの質問の中で、再稼働については政治が最終的な判断をするということは、例えば規制委員会で活動性の疑いがあるというふうな指摘があったとしても、政治的に動かすという判断があれば、規制委員会の判断というのは置いといて政治的判断を優先するというこの意味だったんでしょうか。

【市長】 恐らく今の政治、政府の中では規制委員会に任ずということになっていますので、現時点では、例えば敦賀のことについて今の状況の中でそれを動かすということはず無理だというふうに私も思っています。

ただ政治の世界というのは、規制庁は絶対的存在で何も介入できないというのもおかしいですし、そこは先ほど言いましたように、おかしいんじゃないですかという疑問があれば、やはりそこは政治が入っていくべきだというふうに思いますので、規制庁、例えば有識者会議を神的存在に祭り上げて、全てそれが正しくてということは、政治というものがありますから、そういう部分で政治が判断するというふうに私は思っています。

【記者】 わかりました。

次に、もんじゅについてなんですけれども、先ほど改革が9月をめどにということで、それまで待ちたいということをおっしゃっていたと思うんですけれども、改革、ことしの9月までに昨年の改革案として出していましたけれども、ほぼ困難な状況にあるという話なんですけれども、例えばこの9月をめどに待ったあげく何も変わることができなかった場合は、さすがに堪忍袋の緒が切れるんですか。

【市長】 まず一つのめどでありますけれども、私も前も言いましたけれども、例えばスケジュールありきで、ここでなければだめという問題でもないと思うんです。これだけ重要な使命を帯びていますし、フランス等もこれからもんじゅを活用しながらいろいろ技術的な研究をともにやろうというところでもありますので、それはそれでおきながら、機構全体としての改革というのは非常に重要でありますので、まずそれを一歩ずつ、例えば階段10段上る、今は5段しか上ってない。9月に10段じゃなかったらだめよというものではないと思いますし、ちゃんと改革を10段上り切ることをまずなし遂げてほしい。これが早くなればいいことですし、それが9月だから、もうそこで云々ということは思っておきません。ともかくしっかりと改革をなし遂げる、このことが重要だというふうに思います。

【記者】 市長として、もんじゅの国際的に技術として意義というのをおっしゃっていますけれども、機構という組織にもんじゅを任せられないというふうに思わないんでしょうか。

か。

【市長】 恐らく今まで機構として取り組んできた事業で、じゃ誰がやるかということになりますとちょっと私も今わかりません。例えば本来ですと、うまくいっておれば機構がやっていって、次の実証炉なりは民間という形でやる予定でしたけれども、まだ民間に渡すまで行っていないのが現状ですから、やはり機構として、次のところに渡せるだけの土台を機構が責任を持ってすべきだというふうに思いますので、まずもんじゅというものについては、やはり機構が責任を持ってやるべきだというふうに思いますし、決してやり遂げられないということはないと思います。しっかりやり遂げてほしいというふうに思っています。

【記者】 ありがとうございます。

【秘書広報課長補佐】 ほかによろしいでしょうか。

【記者】 今ほどのお答えに関連してなんですけれども、敦賀2号の破砕帯の再評価について、まだ現状では審議されていないと思っているというお答えだったんですけれども、それはどんなふうに理解すればよろしいですか。

【市長】 先ほど言いましたように、科学的、技術的な審議にはなっていないというふうに思います。といいますのは、先ほど言いましたように、ピア・レビューの先生方、また他のいろんな見識を持った先生方、入って議論しておりませんので、やはりそこでのしっかりした議論。御社の新聞のほうにも、同じ裁判官で同じ事件を判断して、結論というのは恐らく変わらないというもおかしなものでありますから、いろんな角度で見て判断をすべき。大変これは重要な問題でありますので、そういう意味ではまだしっかりとした審議はなされていないというふうに私は感じております。

【記者】 そうしますと、今後も規制委のほうがこういう方向で進めていくとなると、市としてはどのような振る舞い方になるのでしょうか。

【市長】 恐らくピア・レビューの先生を入れてこれからまたやるという情報もありますから、そのあたり。それと幅広い先生方の意見を聞いてやっていくことも、まだ日程的には決まっていませんけれども、そういうものがなされることをまず期待をいたしております。

【記者】 重ねてで申しわけないんですけれども、前回判断した活動性が否定できないと判断したあの進め方ですと、現在のメンバーで一旦結論を出して、それを査読というかピア・レビューという形で結論を動かさず適当かどうかというのを見るという形でやったかと思うんですけれども、そういう形ででも外部の人が加わればそれでよろしいのでしょうか。それとも結論にまでその外部の人が入っていくべきだと。

【市長】 当然私どもは、結論は外部の皆さん方もしっかり入って、そしていろんな科学者、専門家から見てもそうだなというところ、そして私ども一般市民、国民にわかりやすく説明をする。その段階を経るべきでありまして、今の有識者の中だけで結論を出すということは、到底私どもはそういうことをなされるとは思ってはおりません。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 市長さんに伺いたいんですけれども、日曜日、敦賀青年会議所がエネルギーとまちづくりというふうな講演会と討論をしまして、趣旨を聞いたら、原電が動いてないと景気が悪いというふうな、ただ待ち続けるような市民の意識を変えて、原発ありきでなく自分たちでまちづくりとかお商売のことをやっていくふうに市民の意識を変えたくてやったというふうに、そういう趣旨だったんですけれども、私、敦賀に来て2年ぐらいで、そういう若い、しかもお商売の人がそういうのをやる動きは初めてだと思うので、市長さんは、そういう原発再稼働ありきでないようなまちづくりに民間の若者が動き出したということはどういうふうに思われますか。

【市長】 民間、特にJ Cの皆さん方、私もシニアですから。ただ、その会議についてはちょっと認識なくて、ご案内もなかったんですけれども、当然これはいいことだというふうに思います。

それと、再稼働云々、原子力云々とありますけれども、決して敦賀のまちは原子力だけではございませんし、確かに大きな部分は占めていますので、それはそれとして取り組みながら、やはりほかの分野で、私いつも言うておりますように観光でありますとか他の産

業、産業団地、またいろんな企業誘致、そして港、いろんなところがございまして、それを十分活用して若い皆さん方がいろんな事業に取り組むということは非常に素晴らしいことだというふうに思っています。そういう皆さん方の動きに期待をいたしております。

ただ、原子力は原子力としての分野がございまして、これはまた行政として私ども対応しているわけでありまして、決して敦賀は原子力が全てではありませんので。今のお話ですと何か今は敦賀のまちには全て原子力に頼っているというように捉えられましたけれども、それはそれとして大事、原子力は原子力として大事だというふうに思っています。若い皆さん方のそういう動きというのは私どもも期待をいたしております。

【記者】 実際こういうふうに進んでいって、本当に頼るといえるのか、なくてもやっていけるようになったりするということは、市長さんにとっては望ましいことなのかどうか。どう思いますか。

【市長】 世の中いろんな産業がうまく成り立っています。たまたま敦賀というのは原子力を誘致して半世紀たち、そしてその関連の皆さん方がたくさんおられますので、直ちにその皆さん方が他の仕事にすぐかわって、原子力は風呂敷に包んでどっか持って行ってということができないのが現状でして、あれを廃炉にするにしてもまだ四、五十年かかる。そして雇用についても、やはり今働いている皆さん方が徐々にかわっていくという時間が必要でありますので、そういうものについて徐々に徐々に転換するということは可能かもしれませんが、今当面ある問題として、やはり3・4号機もやっていこうという思いでありますので、そういう国のいろんな動きに注視をしながら立地地域としての思い、これも市としての重要な政策の一つでございまして、そのことについても私どもは頑張っている最中でありまして。

他の産業についてもバランスよく発展させていくのが私はベストだと思っておりますので、港、いろんな分野についても、また商業分野についても若い人たちが知恵を出して元気になるようにということに応援はしていきたいというふうに思っています。

【秘書広報課長補佐】 ほかにいかがでしょうか。

【記者】 敦賀は原発だけでなく魅力たくさんあるという中で、ちょっと冒頭聞けなかった。このサポーター制度、何人ぐらい目指したいとかあれば、ぜひお願いします。

【市長】 このサポーターというのは多けりゃ多いほどいいというふうに思います。それというのはやはり情報が、これは要するに口コミ作戦みたいなものですから、マスメディア、新聞等じゃなくて、個人的に敦賀へ行ったらこういう、僕がサポーターやっておいたらこんなやつをくれて、敦賀へ行ったら温泉入ってきたんだよという。また、こういうパンフレットを配ってほしいと言われておったのでといって友達に配っていく。それはやはり数が多けりゃ多いほど効果があるというふうに思いますので、この制度については、例えば敦賀出身で大学へ行った子でありますとか、また私どもも縁のある方にいろいろお話をして徐々にふやしていきたい。多けりゃ多いほうがいいということを思いながら、当面、何人目指しとったけな。

【理事（企画政策担当）】 予算上は30人なんです。予算上です、あくまでも。

【市長】 現予算上は30人ですけども、私は多けりゃ多いほうがいいですし、またふえれば予算をつけていきたい、このように思います。

【秘書広報課長補佐】 ありがとうございます。

時間となりましたので、これもちまして5月の市長定例記者会見を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

午後2時53分 終了